

## 夢幻団地

作・村尾悦子

### 【登場人物】

夫(トシオ) 五〇代後半

妻(キョーコ) 五〇代後半

若い男(タツヤ) 二〇代

若い女(ユキ) 二〇代

### 【場所】

取り壊しの決まった古い団地の一室。

### 【時間】

ある春の午後

### 【舞台】

取り壊しの決まった古い団地の一室。がらんとした空間。奥に出入り口があり、手前にベランダに通じる窓がある。床には壊れたコンクリートブロックが数個転がっている。上手には板が立てかけてあり、その後ろに隠れた部屋がある。

ベランダから見える団地の中庭には満開の桜の木が立っている。

入口にスーツ姿の夫とワンピース姿の妻、手をつないで現れる。夫はゴザ、妻はバスケットをそれぞれに持っている。

二人、そっと入ってくるとゆっくりと周りを見回す。

夫 ほら、着いたよ。

妻 ここ？

夫 ああ、ここだよ。

妻 うっ、かび臭い。

夫 ああ…。

妻 ずいぶん汚れてるのね。

夫 仕方ないよ、もう誰も住んでないんだから。

妻、部屋をぐるっと一周する。

妻 なんだか狭い。こんなに狭かったかしら…。

夫 家具がないとかえって狭く感じるんだよ。

夫、舞台手前に来る。

夫 ごらんよ、もうガラスが全部外されてる。

妻 そうね。外がよく見えるわ。

夫 (入口を振り返って) ドアもとっばらってあるし…。ほんとにもうすぐ取り壊されるんだなあ。

妻 (ぶるっと震えて) 寒い。

夫 風が通り抜けるんだよ。気をつけろ、風邪ひくぞ。

妻 大丈夫、平気よ。

妻、バッグからスカーフを出して肩に巻く。

夫 (妻を振り返り)これでいいんだろう？

妻 ええ、そう。これがしたかったの。

妻、手前までくる。ベランダを見ている。

妻 洗濯物がひらひら風に揺れてたの。

夫 え？

妻 夢の中で…。

夫 ああ。

妻 毎晩見たのよ、このベランダの夢。

夫 そうか…。

妻 私、鼻歌を歌いながら洗濯物を取り込んで、それから一枚ずつ丁寧に畳むの。

夫 うん。

妻 洗濯物の中には必ずメグミのシャツが入ってるの。こんなに小さいの、メグミのシャツ。洗ったはずなのに、どっかにミルクの匂いが残ってて…。私、こうやって嗅いでるの。

夫 そうか…。

妻 どうしてかしらね、目が覚めた後もその匂いがずっと忘れられないの。

夫 ……。

妻、ベランダをゆっくりと見回す。

妻 こんなふうになつてたのね。

夫、中庭を指さす。

夫 ほら、見ろよ。やっぱり桜、きれいだよ。

妻、中庭を見る。

妻 ほんと、きれい。

夫 な、やっぱりここから見るのが一番だ。

妻 あの時と変わらない。

夫 うん、昔と同じだ。

妻 もつたいないわね、こんなにきれいに咲いてるのに、周りにだれもないなんて…。

夫 そうだよなあ、今日みたいな晴れた日は、みんな周りにゴザを敷いて、ご近所で集まって…。

妻 手作りのおにぎりや、おかずを持ち寄って…。

夫 うちは、いつもここから、このベランダから、花見したよなあ。

妻 特等席だつていって、ここでよくお酒飲んでたわね。

夫 そうだよ、だつて真正面なんだから…。ここから見るのが一番なんだよ。俺たちを待っててくれたんだよ、あの桜。

妻 そうね、きつとそう。

夫、持ってきたゴザを敷くとその上に胡坐をかく。

夫 さあ、せっかく来たんだ。今日は気が済むまでここにしよう。

妻 ありがとう、そうしましょう。

夫 さあ、見せてくれよ、そのバスケットの中身。

妻 ええ、わかったわ。

妻、靴を脱いで、ゴザの上に座ると、バスケットの中からいろいろなものを取り出していく。

夫 ずいぶん持ってきたんだな。

妻 ええ。

夫 お、うまそう、このサンドウィッチ。カツサンドか？

妻 そう、ベーカリー山口の。

夫 うまいんだよなあ、ここの。こっちは…。

妻 稲荷ずしよ、樽寿司の、注文しといたの。それからこれは春栄堂の草餅と、こっちは香味屋の生ロールケーキ、メグミの好物よ。

夫 ずいぶんはりこんだんだな。

妻 だって、今日は、お祝いだもん。

夫、バスケットの中からワインを取り出す。

夫 とにかく乾杯だ。

夫、コップにワインを注ぐ。

夫 さあ。(妻にコップを渡す) それじゃ、二人だけの花見に…。

妻 (夫の言葉を打ち消すように) ううん、メグミの結婚を祝して…。

夫 ……。

妻 乾杯！

夫 ……乾杯。

夫、ワインをぐつと飲む。

夫 ああ、うまいな。やっばりのど乾いてたんだ。じゃあ、ひとつ、もらおうかな…。

夫、サンドウィッチを取って食べる。

妻 愛は忍耐強い。

夫 え？

妻 愛は情け深く、ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。

夫 どうしたんだ？ いきなり。

妻 神父様のお話…、本当だったら今頃あつたはずだわ。

夫 (時計を見る) そうか…、ちょうど今頃か…。

妻 祭壇の前に二人が立って…。それから二人は誓いの言葉を言ってキスをする…、ちよつと待って…、指輪の交換の方が先かしら…、そうね、指輪の方が先だわ。あなたは花嫁に付き添ってバージンロードを歩いたはずよ、花嫁を花婿に渡すと静かに自分の席に着くの。私は最初から自分の席にいるのかしら？ でも、控室には一緒にいたいわ、だって花嫁の母ですもの。どのタイミングで席に着けばいいのかしら…、ねえ、どう思う？

夫 そんなことは心配しなくても、式場の人がうまく誘導してくれるんだよ。

妻 そうね、つまらない心配ね。

夫 うまいな、このサンドウィッチ。君も食べるよ。

妻 (サンドウィッチを一つとつて) ええ、(食べる)

夫 このソースがいいな。

妻 なかなか家では作れない味よ。私、お料理あんまり得意じゃないし…。

夫 そうでもないけどな。なかなかいいよ、君の筑前煮なんか…。

妻 筑前煮か…。そういうええしばらく作ってなかったわね…。

夫と妻、黙ってサンドウィッチを食べる。

妻 ねえ、新婚旅行はいつ行くんだったかしら？ 式が終わってすぐ？

夫 それはまだ決めてなかったんじゃないか？ 二人とも仕事があるだろう、一段落つてからヨーロッパかどこかに行くつもりだったんじゃないか？

妻 そうね、そうだったわね…。ということは、本当なら今晩は東京のホテル？ それとも自宅？

夫 さあな、それもまだ決めてなかったよ…。

夫、ワインをコップにいれようとして、ふと、入口の方を見る。

入口に若い男が立っている。

若い男、こちらを見ている。夫と目が合うと、ゆっくりと中に入ってくる。

…続く